

鹿児島県立短期大学 人文学会論集 「人文」 第四一号 (二〇一七年一〇月三十一日発行)
抜刷

『赤染衛門集』二二六番歌について

——赤染衛門は越の国に行ったのか——

木戸 裕子

『赤染衛門集』二一六番歌について

— 赤染衛門は越の国に行ったのか —

木戸 裕子

平安時代中期の歌人である赤染衛門の家集である『赤染衛門集』は雑纂形態の流布本系と類纂形態の異本系に大きく二分できるが、流布本系は六〇〇首あまりの歌をほぼ制作年代順に配列し、おそらく赤染衛門の自撰であろうと考えられている注^一。

赤染衛門は一条朝を代表する儒者である大江匡衡の妻としても知られており、その家集中には夫匡衡との結婚生活や、夫の国司赴任に同行した折の出来事を詠んだ歌も多い。

その中の一首『赤染衛門集』二一六番歌は、現行の二つの注釈書注^二では匡衡の越前権守補任と関連づけて解釈されているが、それは妥当であらうか。

—

まず、問題の二一六番歌を、流布本系の最善本とされ現行注釈書の底本ともなっている榊原本によって挙げる注^三。

はやうすみしところにいますむ人ほかへなむいぬ
へきをさらぬさきにこしにていかたいめんせん

ふる里のみゆきはなをあらんなむよかるへきと
いひしに
忘れにしむかしやさらに恋られんよにふるさとのみゆきせりとも

詞書の「こしにて」は、異本系の桂本では「こゝにて」となっているが、現行の注釈書は、いずれも底本どおり「こしにて」の本文を採用している。

私家集全釈叢書の『赤染衛門集全釈』（以降、『全釈』と呼ぶ）では

はやうすみしところに、今住む人「ほかへなむいぬべきを、さらぬ
さきに、こしにていかたいめんせん、ふる里のみゆきはなほあら
んなむよかるべき」といひしに
忘れにし昔やさらに恋ひられんよにふる里のみゆきせりとも

と本文を立て、語釈に「〇こし 越の国。今の北陸地方。匡衡は越前
権守であつたことがある。」としている。また、通釈は

以前私どもが住んでいた所に、今住んでいる人が「よそへ行くこ

とになっていますが、その前に越でどうかしてお会いしたい。以前住んでいた所の雪はやはりある方がいいでしょう」と言ったので

すでに忘れてしまった昔がまた恋しく思われることでしょう。以前住んでいた所は雪が降っていても

としている。

つまり、「こしにて」を越の国と解し、その語釈に匡衡の越前権守補任に言及することで、「はやうすみしところ」は、赤染衛門が匡衡とともに住んでいた越前の邸であるにとらえている。

また、『全釈』の十五年後に出版された、和歌文学大系の『赤染衛門集』（以降『大系』と呼ぶ）では、本文を

早う住みし所^{はや す いま す}に今住む人^{いま す}、他^{ほか}へなむ往ぬべきを、さらぬ先に、越^{こし}にていかで対面^{たいめん}せん、ふる里^{さと}のみ雪^{ゆき}はなほあらんなむよかるべき」と言ひしに

忘れにし昔^{むかし}やささらに恋^{こひ}られん世^よにふるさとのみ雪^{ゆき}せりとも

と立てて、「早う住みし所」を「赤染が以前住んでいた所」、「越にて」を「桂」「ここにて」。越の国は現在の北陸地方、匡衡は長徳三年（九九七）に越前権守に任じられた。「越にて」とすると、匡衡が越前権守出会った当時の邸に住む人が、その邸での対面を望み、洒落てこう表現したのか。」と注しており、『全釈』の解釈を踏襲している。

しかしながら、「こしにて」という榊原本の本文をそのまま採用しても良いのだろうか。

実は、この二二六番より少し後、榊原本二三〇番歌に、「こしに」という語句が出てくるのである。

ちこをはこしにむかへておきたるにこまのかたをつくりておこせて

わかのかへになつかぬこまとおもふにはてなれにけるをなくさめにせん

この「こしに」も桂本では「こゝに」である。しかしながら、この歌は、赤染と匡衡の息子である挙周の妻となり同居していた高階明順女が、挙周と不仲になって出て行つたあと、二人の間に生まれた幼児を引き取つた際のもののなので、「こしに」では意味が通じない。したがって、『全釈』では桂本をはじめとする類纂本の本文を採用して「ここに」を「自邸に」と解釈している。『大系』は、本文は「こしに」のままであるが、注に「類「ここ」として解している。

榊原本を見ると、二二六番詞書の「こしにて」も二三〇番詞書の「こしに」も全く同じく、己を字母とする「こ」に之を字母とする「し」が続く形である。したがって、二二六番だけを強いて「こし」のままで解する必要があるのか疑問が残る。

次に、榊原本以外の流布本系の伝本も確認しておきたい。榊原本と同じ流布本系一類本に属する伝本には他に数本があるが、その中でも宮内庁書陵部蔵鷹司本は比較的古い形を保った本文で他本に共

通の誤りを正せる部分があるという。また、島原松平文庫本は榊原本と親本を同じくするもので、脱落箇所や語の異同がほとんど一致するという注四。

鷹司本の当該歌の詞書を見ると注五、

はやう住し所に今住人ほかへなんいぬへきをさら
ぬさきにこゝにていかてたいめせん古郷の御雪
はなをあらんよかるへきといひしに

とあり、「こゝにて」は古を字母とする「こ」に踊り字が続く形で、桂本と同じい。

松平文庫本の当該箇所は注六、

はやうすみしところにいますむ人
な（見セケチシテほと傍書）かへなむいぬへきをさらぬさきに
こゝにていかてたいめむせんふる里
のみゆ事（見セケチシテきト傍書）はなをあらむなむよかるへ
きといひしに （ ） 内稿者

であり、「こゝにて」の「こ」は鷹司本と同じく古を字母とする仮名であるが、続く踊り字は、松平本の他の箇所の踊り字とやや異なり、長めで「し」とも「く」とも読めるような形をしている。

以上のことから、榊原本の二一六番歌の詞書も、本来「こゝにて」であったものが、親本の書体がすでに見誤りやすいものであったためか、書写者が「こしにて」と誤ったと考えられるのである。

二

前章では、『赤染衛門集』の諸本を検討して、二一六番歌の詞書の「こしにて」が本来「こゝにて」であった可能性が高いことを論証した。

しかしながら、諸注釈が「こしにて」の本文を採用したのは、匡衡が越前権守に任ぜられたことによる。本章では、匡衡が果たして越前国に赴任したのかどうかを検討する。

諸注指摘するように、長徳三（九九七）年一月二十八日、四十六歳の匡衡は越前権守に任命されている。これは『中古歌仙三十六人伝』に載せる匡衡の略伝による。匡衡は前年、長徳二年の除目前に「請殊蒙天恩以檢非違使勞兼任越前尾張等國守闕狀（殊に天恩を蒙りて檢非違使の勞を持つて越前・尾張等の國守の闕を兼任せられんことを請ふ狀）」『本朝文粹』巻第六へ、すなわち越前や尾張などの國守を望む奏狀を提出していた。

だが、長徳二年の除目においては、藤原為時が越前守に任命されている。

正月二十八日、己巳 右大臣（道長）参内、俄停越前守国盛、以淡路守為時（藤原）任之。（右大臣参内し、俄に越前守国盛を停

め、淡路守為時を以て之に任ず。）

『日本紀略』長徳二年正月二十八日条

これは、『今昔物語集』巻二十四第三十や、『古事談』巻一第二十六などにも記されている有名な逸話で、淡路守に任ぜられた為時が、その不満を奏状にしたが、その中の句に心を動かされた一条天皇と道長によって、即座に越前守に移された、というものである。

この前年長徳元年九月には、越前の隣の若狭国に宋人六十余人が来着し、客館のある越前国に移されたことが、『日本紀略』に記されており、為時の越前守補任はその対応のためとも考えられ、実際に為時は、宋人の中心人物と目される商人羌世昌と漢詩の贈答を行っている^{注七}。

また、為時の娘である紫式部も、父に従って越前に下向したことが、『紫式部集』によって知られている。

このような時期に匡衡が越前権守に任命されたとはいっても、おそらく実際に下向することはない遥任であったと考えられる。

また、匡衡自身、前年の為時の越前守赴任に当たって、餞別の漢詩を贈っているのである。

餞越州刺史赴任

越州刺史の赴任に餞す

鏡水蘭亭君管領
翰林李部我艱辛
明時衣錦昼行客

鏡水 蘭亭 君管領し
翰林 李部 我艱辛す
明時 錦を衣る 昼行の客

暗牖彈冠晩達人
司馬遷才雖漸進
張車子富未平均
越州便是本詩国
宜矣使君先遇春

暗牖^{あんくわう} 冠を弾く 晩達の人
司馬遷^{いへん}の才 漸く進むと 雖も
張車子^{ちやうし}の富 未だ平均ならず
越州^{もと}は便ち是れ本詩国
宜^{むべ}なるかな使君の先づ春に
遇はんこと

(四)

『江吏部集』巻中

匡衡は、越州すなわち越前の国守となつて管領する為時を、漢の朱買臣が会稽郡の太守となつた時の錦を着て故郷に帰る喩えを引いて称え、翰林吏部、すなわち文章博士で式部権少輔である自分は、冠を弾いて仕官の準備をするばかりと不遇を歎いている。そして、尾聯において、越前国は本来詩国であるのだから、為時が使君すなわち国守となつて栄達するのも当然だと祝福しているのである。

そのうえで翌年匡衡自身も越前に赴任することが決まったならば、なんらかの漢詩が残っているはずである。しかし、『江吏部集』にも『本朝文粹』にも、匡衡の越前赴任を思わせる作品は残っていないのである。

『赤染衛門集』にも、匡衡と赤染が越前国に滞在したことを思わせる歌は全くない。四年後の長保三（一〇〇一）年正月に匡衡が尾張権守に任ぜられ、三月に尾張国に赴いた時は、匡衡が書いた喜びの書状がいくつか残っており^{注八}、『赤染衛門集』にも、一六九番歌から二〇二番歌にかけて、長保三年の七月に匡衡に同道して尾張に赴いたこと、尾張国での出来事、四年後の帰京まで四十首近い歌を残している。にもかかわ

らず、それより前の越前権守に関する作品が何も残っていないのは、やはり二人が越前国に滞在したことがないことを意味していよう。

何より、匡衡は長徳三年正月二十八日に越前権守に任ぜられた一か月半後の三月九日に東宮学士となっている。東宮学士は東宮すなわち皇太子の学問の師であり、儒者としてこの職に就くことは大きな名誉であった。同時に、常に東宮のいる都に居なければならないことを意味する。匡衡晩年の自伝的詩である「述懐古調詩一百韻」(『江吏部集』巻中)において、東宮学士任命をこのように詠じている。

四十六学士

四十六にして学士たり

龍樓景気妍

龍樓景気妍し

意味は、四十六歳で東宮学士に任命され、龍樓すなわち東宮御所のすばらしい有様を身近に拝見した、となる。匡衡は東宮のお側に仕える儒者となったのである。

実際、この年匡衡が都の外に出ている余裕はなかった。七月から八月に、匡衡は紀齊名との間で、大学寮の省試の判定の適否を廻っていわゆる省試論争を展開しており、そのやりとりは『本朝文粹』巻第七にそれぞれ二篇の奏状として残っている^{注九}。九月は宮中の重陽宴において「菊是為仙草」の詩題を献じ講師となり^{注十}、十月には道長邸での詩宴で序者となっている^{注十一}。翌長徳四年には従四位下に昇り、式部権大輔になった。この昇進も匡衡にとって大きな出来事だった。前述の「述懐古調詩一百韻」においても

四十七四品

四十七にして四品たり

職主衡与銓

職は衡と銓とを主とす

と詠じ、四十七歳で四位に叙せられ、職は式部権大輔として衡と銓すなわち人事考課にあたるようになったという。匡衡の喜びは、昇進直後の道長邸での詩会の詩にも表れている。

春日陪左相府東閣同賦逢春唯喜氣

春の日左相府の東閣に陪し同じく春に逢ふは唯だ喜氣のみと

いうことに賦す

王春喜氣感光陰

王春の喜氣光陰に感ず

温煦就中在翰林

温煦は就中翰林に在り

四品新袍応道貴

四品の新袍は応に道の貴なればなるべし

三官猶帶是恩深

三官猶ほ帶ぶるは是れ恩の深ければなり

寒江漸暖潜魚躍

寒江漸く暖まりて潜魚躍り

枯木半榮好鳥吟

枯木半ば榮えて好鳥吟ず

争遇君臣合体日

争ひて遇ふ君臣合体の日

萬心扑悦聖賢心

萬心扑悦す聖賢の心

『江吏部集』巻上

春が来た喜びを、自身の四品(四位)昇進と三官(文章博士、東宮学土、式部権大輔)兼任の喜びに重ねている。ここにも越前権守のことは

全く触れられていない。

ではこの時期の赤染衛門の和歌はどのようなものがあるだろうか。『赤染衛門集』の和歌は制作年代がはっきりわかるものは少ないが、長徳二年から長保二年にかけての歌と判断できるものが二首ある。

『全釈』に依ってあげると、一つは「一三〇番の歌である。

「帥殿そとのにしたしき人のゆかりなりしは、えまゐるまじ、となんある」と聞きしかば、さとにあるはる、うへの御前のおほせ事にて「花のさかりなるを見せまほしくなんある」とおほせられたりしに、まゐらせたる

もろともに見るよもありし花桜人づてに聞く春ぞかなしき

帥殿は、中関白藤原道隆男、藤原伊周。『全釈』は「伊周・隆家兄弟は花山法皇を射奉ったこと、東三条院を呪詛したこと、秘かに太元帥法を修したことなどの罪により、長徳二年四月、太宰権帥と出雲権守に左遷された（『小右記』・『日本紀略』）。この歌は、その年の桜の咲く頃に詠まれたもの」とする。この左遷事件を受けて赤染衛門も里に蟄居していたらしいが、この歌を上のの御前すなわち道長室倫子に奉って後、再び出仕するようになる。その後、道長邸での女房としての詠歌が続いて、一三五番では、

五月五日右大将殿より、さうぶあはせしたるあふぎに、くす

だまをおきて「これがかちまけ、さだめさせ給へ」とありしに、とのは左大臣におはしまししかば

ひだりにや袂の玉もむすぶらん右はあやめのねこそあさけれ

と詠む。

右大将殿は藤原道綱、とのは藤原道長である。右大将道綱から、菖蒲合せの勝ち負けの判定を依頼された赤染が、菖蒲合せの右方と左方を右大将と左大臣になぞらえて、左の勝ちとした歌を詠んだものである。『全釈』は「道綱が右大将だったのは長徳二年十二月から長保二年七月まで。道長が左大臣であったのは長徳二年七月から寛仁元年十二月まで、この条件を充たすのは長徳三年から長保二年の間（九九七—一〇〇〇）である。この歌の詞書は、歌の内容からみて、当時の官名で書かれているとみられる」とする。この歌の後道長家関連の歌が続くので、赤染もまた都から離れてはいないことがわかる。

したがって、大江匡衡と赤染衛門の動向からみても、二人が越の国で暮らしたことは認められないことになる。

以上、榊原本『赤染衛門集』一二六番歌の「こしにて」は越前国のことではなく、「こゝにて」の誤写であろうこと、赤染衛門とその夫大江

匡衡は越前国に滞在したことはないことを論証した。これらを踏まえて、一二六番歌の本文を確定し、その通釈をするならば、

はやうすみしところに、今住む人、「ほかへなむいぬべきを、さらぬさきに、ここにていかでたいめんせん、ふる里のみゆきはなほあらんなむよかるべき」といひしに

忘れにし昔やさらに恋ひられんよにふる里のみゆきせりとも

私が以前住んでいたところに現在住んでいる人が、「別の場所に行かなければならないのですが、引つ越す前にここですうにかしとお会いしたいのです。やはり昔なじみの場所にあるうちにおいでになるほうがよいでしょう」といつてきたので詠んだ歌。忘れてしまった昔のことが、また恋しく思われるでしょう。以前生活していた昔なじみの雪の降るあの場所をお尋ねしたとしても。

(今、そちらにお伺いしても、昔のことがいつそう恋しくなるだけです。)

となろう。

では、この「はやうすみしところ」とはどのような所なのか。現在そこに住んでいる人が、赤染衛門に「ここ」でどうにかして対面したいと言ひ、その人も赤染衛門もそこを「ふる里(昔なじみの場所)」と呼び、そして赤染が「忘れてしまった昔が又恋しく思われる」と詠嘆する所である。第一に考えられることは赤染の実家であるが、果たしてそうだと

うか。

実は『赤染衛門集』には一二六番歌以前に「はやうすみしところ」がもう一カ所出てくる。それは、赤染衛門が大江匡衡と結婚する直前の七三番歌である。

はやうすみしところにかしらあらひにいきて

ふる里のいた井のなかはすみながら我みづからぞあくがれにける

「はやうすみしところ」に髪を洗いに行つて、そこを「ふる里」と呼び「我みづからがこの場所から離れてしまった」と嘆じている。一二六番歌の詠歌年代からは約十五年程前になるが、同じ場所と考えてもよいのではないだろうか。

この次の七四番・七五番歌は、匡衡と結婚した時の後朝の贈答である。

かたがへにきたる人の、とのみ物をいだしたれば、つとめていひたる

よやどりのあしたの原のをみなへしうつり香にてや人はとがめん

返し

宿かせば床さへあやな女郎花いかでうつれる香とかこたへん

したがって、七三番歌を詠んだ時は、赤染衛門は独身で実家住みの時

であつたはずであり、「はやうすみしところ」が実家であるとは考えがたい。

しかし、当時、洗髪は一日がかりの大仕事であり、しかも一人でできるような作業ではなかった^{注十二}。洗髪をさせてもらえるようなところとは、かなり親しい関係にある家といえよう。

ここからは憶測となるが、この「はやうすみしところ」とは、赤染衛門の母の実家または親戚の家ではなからうか。赤染の母が誰なのかは不明だが、赤染に同腹の妹がいることから^{注十三}、赤染の母と赤染の父赤染時用は安定した関係にあつたと考えられ、赤染が匡衡と結婚する二十代前半には、両親は同居していたのではなからうか。そう考えると、「はやうすみしところ」とは、両親の同居前に赤染が子供時代を過ごした母の家とすることができよう。

ただ、『赤染衛門集』には両親との関わりが全く見えない。あるいは、母は早くに亡くなつてしまつて赤染は妹とともに父に引き取られた可能性もある。そうであっても、「はやうすみしところ」はやはり母の実家と考えることができる。だからこそ、一二六番歌において、赤染は「忘れにしむかしやさらに恋ひられん」、昔が恋しく思われると詠じたのであろう。

注一 林マリヤ「赤染衛門集について」関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子共著『赤染衛門集全釈』（私家集全釈叢書1）昭和六十一年九月十五日、風間書房 なお、『赤染衛門集』の歌番号も本書による。

注二 前掲書、武田早苗・佐藤雅代・中周子共著『賀茂保憲女集／赤染衛門集／清少納言集／紫式部集／藤三位集』（和歌文学大系二〇）平成十二年三月十五日、明治書院

注三 『榊原本私家集（二）』（日本古典文学影印叢刊一〇）昭和五十四年一月三十一日、貴重本刊行会

注四 注一に同じ。

注五 図書寮文庫 鷹・四〇六『赤染衛門集』国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース（宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム）による。

注六 島原松平文庫 一三五・二六『赤染衛門集』国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースによる。

注七 「観謁之後以詩贈太宋客羌世昌」「重寄」「本朝麗藻」巻下「贈答部」

注八 「奉行成状」「奉頼光状」「本朝文粹」巻第七

注九 「省試詩論」「本朝文粹」巻第七

注十 「小右記」長徳三年九月九日条

注十一 『権記』長徳三年十月十二日条 「七言暮秋陪左相府書閣同賦寒花為客裁應教一首（以心為韻并序）」（七言。暮秋。左相府の書閣に陪し同じく寒花客の為に裁うといふことを賦す。教に応ずる一首（心を以て韻と為す並びに序））『江吏部集』巻下

注十二 「宮、つとめてより暮るるまで御髪すます。御湯帷子して、おもと人立ち居て参る…」『うつほ物語』『蔵開中』『タツ方、宮こなたに渡らせたまへれば、女君は御ゆするのほどなりけり…

『をりあしき御ゆるのほどこそ、見苦しかめれ。さうざうしく
てやながめん』と聞こえたまへば、『げに、おはしまさぬ隙ひま
にこそ例はすませ、あやしう、日ごろ、ものうがらせたまひて。

今日過ぎば、この月は日もなし。九、十月はいかでかは、とて仕
らせたまふを』と、大輔いとほしがる」(『源氏物語』「東屋」)

注十三「中関白殿の、藏人の少将と聞えしころ、はらからのもとにお
はして、「内の御物忌にこもるなり。月の入らぬさきに」とて出
で給ひにしのちも、月ののどかにありしかば、つとめてたてまつ
れりしにかはりて 入りぬとて人のいそぎし月影は 出でての
のちも久しくぞ見し」「おなじ人、たのめておはせずなりにしつ
とめて奉れる やすらはでねなまし物を小夜更けて かたぶく
までの月をみしかな」『赤染衛門集』三、四番歌

(二〇一七年七月一八日受理)